

Cover Story

今回の巻頭文は本校事務長である
長田さんにご寄稿いただきました。



いよいよ学年の終わりですね。だんだん活動範囲が広がり、友達とも離れることが多くなるかと思います。そこで、試験も終了し落ち着いたら、友人と構内散策をお勧めします。スマホやゲーム機を、ちょっとポケットに入れておくのがいいですね。

少々(?) おじさんですが、僕と校内を散策してみましょう。正門を入れて左側前方に大きな常緑の木、枇杷(びわ)があります。

キャンパスに花がなくなる11月頃、よく見ると小さな白い花が寄り集まっています。香りはしませんが茶と白のバランスが良いですね、近寄って手にしてみてください。6月頃、実がだんだんと黄色くなってきますので、毎朝、一粒皮をむいて食べてみてください。「美味しい」となったら、沢山食べる。そうしないと次の日にムクドリが集団で飛来して半日で食べてしまいます。駄句を一つ。

枇杷の木や校庭(にわ)の声ききまちてあり 天信(僕のこと)

正門を入れて左に折れて進むと左に唐カエデ(別名「三角楓」浅く3つに割れています)が数本並んでいます。秋には黄葉して、青空によく映えます。春には三角の若葉が可愛い。硬式テニスコートの脇にもこの木々があります。慶應全体で並木があるところは、日吉の公孫樹、樺、湘南藤沢の南京ハゼ、桂と4箇所です。志木高の自慢にしても良い唐カエデの並木です。少し進んで柔剣道場前を右折、直ぐ左にハナミズキ、白い清楚な花で厚かましくなく咲いている様子がいいです。陽光舎の前をとおり突き当りを右折、春には新緑のトンネルを歩いている感覚になり、毎年何となく元気が出てきます。君はどうですか?

グラウンドにでる坂道の前方には菩提樹が見えます。シューベルトの“冬の旅”の一曲、菩提樹(W. ミュラー作詩)で歌われています。「青春の憂鬱」は、君にはまだ早いね。この木の葉はハート形をしています。右側が少し大きくなっていたと思います、手にして確かめてみて下さい。好きな女の子に手紙の中に入れて送ると良いです。そんなの古いよ、メールの飾りで送る。了解。

グラウンドに立つと一気に眺望が広がり、志木高のキャンパスの広さを実感できます。ここで振り返って見上げるとポプラの木が聳えています。ポプラには枝が纏まって真直ぐになる種類もありますが、志木のポプラの枝はいろいろな方向に伸びています。6月に種子を含んだ綿毛(猫の腹毛の手触り)が多量にできて、風に運ばれ志木駅のほうまで飛んでいます。戻って菩提樹のある近くに「憩いの広場」があります。ベンチがありますので少し暖かい日には、スマホをするのもゲームをするのも寝るのも友達と試験の予想をするのもお勧めです。芝が生えたら素足で歩いてみて下さい。フワッとして力強い足応えで、高麗芝の強い弾力を実感するでしょう。

短い散策ですが付き合ってくれて有り難う。皆さんもいろいろ触れてみて、「生きている今」を感じてみて下さい。



トウカエデ



ボダイジュ

今年も地球の影に月がすっぽり入る現象―皆既月食があります。昨年に引き続き、日本ではその最初から最後までを見ることができます。

東京では月の出が17:55、その直後からうっすらとかげりはじめます。（「半影食」といいます。）地球の影に入り始める部分食の始まりは19:15、約半分が隠れるのが20時頃、月全体が欠けてしまう皆既食は20:54～21:06のおよそ12分間で、食の最大は21:00です。そして再び細い月が出てきて、部分食の終わりは22:45、その後うっすらとした影がとれて元の満月になるのは翌5日の0時頃となります（図参照）。

昨年は10月8日、三年生は見学旅行の2日目、ちょうど全クラスが同じホテルに揃った神戸の舞子で月食を見ることができました。二年生は研修旅行の2日目でそれどころではなかったかもしれません。一年生は特別時間割授業の期間でした。関東地方は曇りがちで見づらかったようです。私はちょうど三年生の旅行についていっていました。神戸は好天に恵まれ月食の最初から最後までを見ることができました。夕刻ホテルに到着すると、もう丘の上に月がひょっこり顔を出していました。しばらくすると少しずつ影ってきて、そのうち欠け始めました。中庭に出て月を正面にして座ると、斜め後ろにはすっかり暗くなった空に明石大橋がライトアップされ最高のロケーションでした。十月の涼しい夜風にあたりながら、ぼけ～と気が向けば写真を撮りながら、心地よい時間を過ごしました。恥ずかしながら皆既月食の一部始終を見たのはこれが初めてでした。

今年の皆既月食は4月4日、まだ授業も始まっていません。昨年見られなかった人もぜひ今年は晴れているところ、ロケーションを選んで出かけて月を見ましょう。もしかすると、ちょうど桜も咲いて月見に花見…良いですね。

4 月 4 日に東京で見る月食 『天文年鑑 2015』

(Higuchi)

ガビチョウ問題 ～春の声が変わる～

Waka

ウグイスは春の訪れを告げる鳥として知られ、「春告げ鳥」と呼ばれたことは以前にも書いた。

春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじと思ふ
古今集・春上・11・壬生忠岑
鶯の谷より出づる声なくは春來ることをたれか知らまし
古今集・春上・14・大江千里

鶯詠は『萬葉集』にも50首以上ある。『古今集』のこれらの歌を見ても、古代の人たちが鶯の声によって春の訪れを感じていたことがよくわかる。

冬の間は笹鳴きといわれる、チャッチャツという舌打ちに似た声で鳴いていた鶯が、立春を過ぎると志木高でもホーホケキョの声聞かせるようになる。2月から3月にかけての時期だろうか。初めは拙く短く鳴いていて、それがだんだん上達してくる。上達しかけてきたころ、繁殖のためにもう少し山の方へ移動していく。早春のまだ他の鳥の声がほとんど聞こえない時期に、鶯の初鳴きを聞くのは好ましい。

ところが、志木高で数年前まだ春浅い時期に、私はとんでもない声を聞いた。それまで聞いたことのない、大きな、張りのある、不思議なメロディーを歌う鳥がいる。頭の中でこの時期の鳥のリストをめくってみるのだが、鳥の名が浮かばない。「おかしい、校内にいる鳥の名前がなぜ浮かばないのか」。呆然とするうち、目の周りを白いペンキで隅どりしたような、大きな緑色の鳥が視界に入った。ガビチョウだ。

昨年も様々なニュースがありましたが、志木も含め各地で数十匹もの犬が遺棄されたり、公園に毒入り餌がまかれ数十匹の猫が殺されたりといった物騒なニュースは記憶に新しいのではないのでしょうか。こうした事件の裏には「動物愛護法」の改正（2013,9施行/環境省HP）があると有識者は見えています。これまで野良はもちろん飼いきれなくなった動物はいわゆる**保健所**〔現在は動物愛護（指導）センター〕に持ち込まれ、殺処分されてきました。センターではこれまで持ち込まれた動物を原則拒否できなかったわけですが、この改正で場合によっては拒否できるようになったという点が大きな違いです。その結果、犬猫の処分に困った悪質なペット業者が自分で殺して遺棄したり、行政がやらないなら自分が退治するといって毒をまいて殺したりということが横行しているようです。

日本では40年以上にわたり犬猫の殺処分を行ってきました。70年代にはその数は年間100万匹を超えていたというから恐ろしいことです。放し飼いが少なくなかった昭和に比べ、最近では野良犬は減ったようですが、猫はここ10年以上殺処分数にして20万匹を下回ることとはなく横ばい状態です。猫は1匹のメスが年間20匹もの子を産むという繁殖力のせいでしょう。しかし法改正を受け、全国のセンターでは殺処分0を競うかのように標榜するようになってきました。この状況において、単に殺処分を止めたのではまた野良猫が増えてしまうと不安になる人も多いことでしょう。それに対して各センターでは、「地域猫活動」を代替策として奨励しています。

ポイントはまず捕獲して避妊去勢手術を行うこと。そして元いた場所に放し、みだりに放浪させて住居侵入したり糞尿被害を出さないように、決まった場所での餌やりをし定住させ糞尿も含めた世話をするということです。1代限りを見守ることで不幸な野良猫を増やさず、殺さず、減らそうということがその趣旨です。ただこれを行うのは行政ではなく地域住民であることが殺処分と大きく異なる点です。ただ避妊手術については、自治体が補助金を交付するようにはなってきましたが。民間に押し付けずに行政がやれよという意見もあるでしょう。しかし地域猫活動をはじめとするこの流れは、欧米先進国では当たり前に行っていることで、やっと日本も動き出したのかという感じなのです。

例えばドイツでは殺処分施設自体ありませんし、代わりに「動物の家」というシェルターが数百か所もあり野良の動物たちを保護しています。どこの国でもペット税があり、その税収でこうした活動は運営されるのが当たり前です。最近ではシェルターの動物たちは学校や老人ホームへ譲渡され、教育や認知症の回復に効果を上げているそうです。殺すのではなく生かして人の為に利用するのは。今の日本ではアレルギーがどうのこうの言いだしそうですね。またドイツでは、ペットはこうしたシェルターから譲り受けるかブリーダーから購入するのが当たり前で、それ以外の販売は禁止されています。海外に比べいかに日本人に動物愛護の精神が乏しいかがわかったと思います。こんな国がいかに捕鯨を正当化しようとも説得力のないものになってしまうのもわかるというものです。

志木近辺でもNPOによる地域猫活動が盛んになってきました。この状況の中、広大な敷地をもち、知る限りでも十数匹の猫が出入りする志木高としても、何もしないのは無責任でしょう。そこで生物部ではここ2年位ですが地域猫活動に協力しています。すでに3匹の里親を見つけ、2匹は避妊手術を行ない放しました。普段、餌やりをしている猫は3匹います。諸君もおそらく目にしている2匹の茶猫は、校内を出入りする野良猫の子供です。兄弟4匹捕獲し、里親がみつからずに残った2匹なので人慣れしています。面白いことにこの2匹はオスですが、去勢したものの縄張り本能が残っているようで、他の野良猫を撃退するのでむしろ校内は以前より野良猫が減りました。しかし最近では敵がいないので、もっぱら兄弟げんかに明け暮れています。

地域猫は判別のために耳カットといって三角形に耳がカットされます。「妖怪ウォッチ」の**ジバニャン**がさりげなく耳カットで地域猫をアピールしているのですが。私たちも国際交流を進めるためにも、動物愛護のあたりからももっと他の先進国に恥じないように努力していかないといいませんか。

(Izawa)

ガビチョウは現在では特定外来生物(侵略的外来種ワースト100選定種)に指定された元籠脱け鳥で、中国が原産とされる。この鳥は体長**25センチ**と比較的大きめで、なにより人を怖れない。とても目立つ。通常、野鳥の姿を見るのはむずかしいことだ。なぜなら人を怖れて逃げてしまうから。しかしガビチョウは人を恐れず、その辺りをごそごそ動き回る。埼玉県内の山中でもどこに行ってもこの鳥はいる。そして、大きな声で鳴いている。この鳥とソウシチョウというもっとけばけばしい色の鳥、これがどこにいても元気よく鳴き、目に入る。ここ十数年位の変化だ。

外来生物についていろいろな意見があることは知っている。鳥に罪はない。

色鮮やかでなかなかきれいじゃないか、という人もいるかもしれない。そもそも野鳥に興味のない人には区別もつかないだろうし。

私はここでガビチョウを駆除しろと主張したいわけではない。ただ、春を告げる声が、まったく別のものになることを見過ごしにはできないと言っているのだ。ホーホケキョというあの声を日本人は春の初めに置いた。春を待つ心も、そこからゆるやかに流れ出す春という時間も、鶯の声によって縁どられてきたのだ。それが、あの、威勢ばかりよくて慎みのないあの声に取って代わられるなんて。(これも動物差別なのだろうか)

そして、私にとり、耐えがたいことは、ほとんど誰もこのことに気づきもしないということ。もう私は「日本文化」ということばは地の底に氷漬けにして眠らせた方がよい、とすら思う。



ガビチョウ

(Hayami)

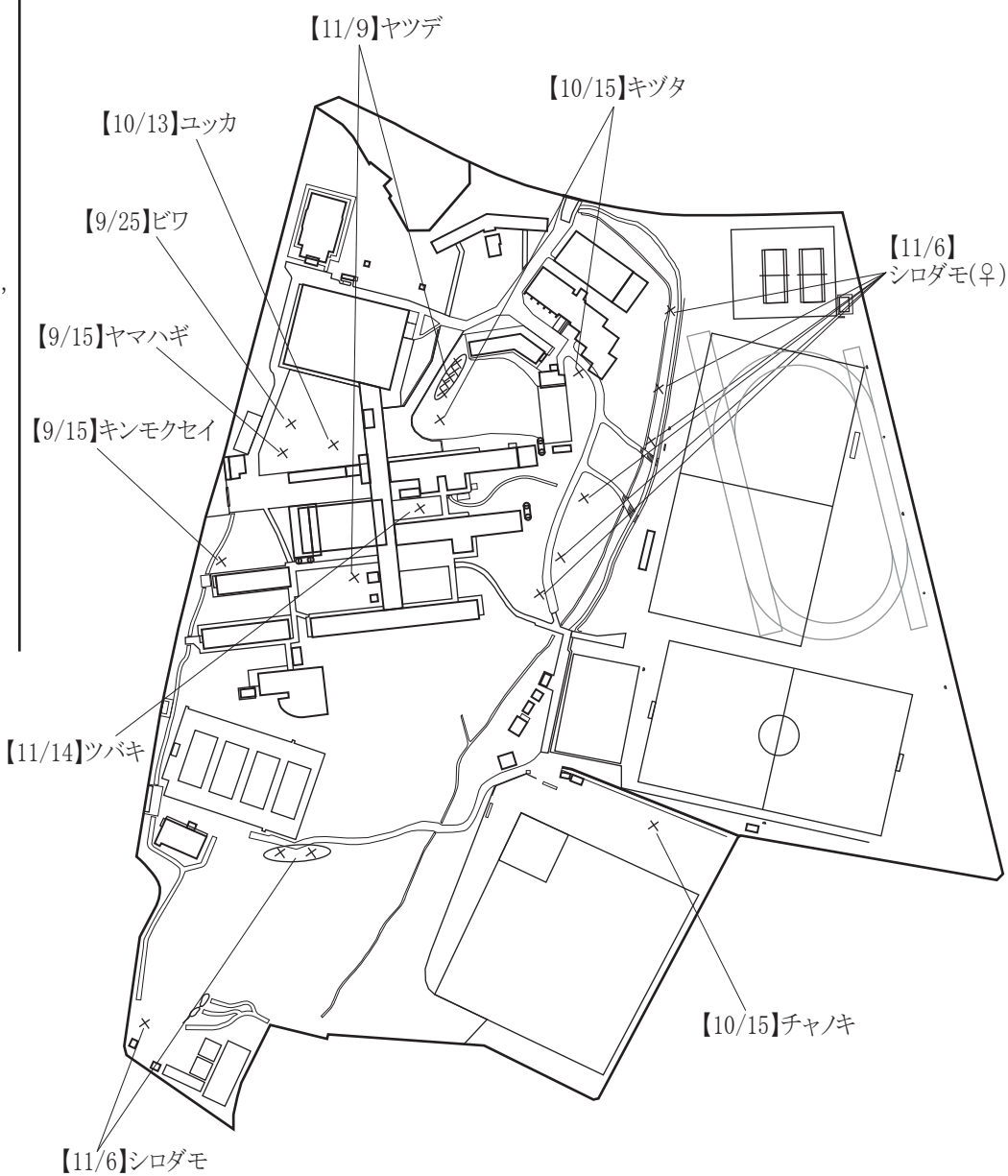
この時期は、校内でサザンカとツバキの花を両方楽しむことができる。だが、これらはどちらもツバキ科ツバキ属に属する木本で、相互に交配して雑種形成が可能なこともあり、その違いがきちんと知られていない。改めてその違いを確認すると、サザンカはツバキに対して開花期が早い（10-12月vs12-4月）。サザンカは花びらを水平に開くが、ツバキはそうならず筒状もしくはラップ状である。そしてサザンカは花びらがバラバラと散るが、ツバキは雄蕊も含めてまとまって落ちる（首が落ちるように見えるので昔の武士はこの花を嫌った）。他にも違いがあるが、花が咲くまさにこの時期、きちんと分類するチャンスである。注意して見て頂きたい。

[2014年9月～2015年1月までの開花情報]

Grass

- 15. Sep. 2014 スズメガヤ, ツルボ, チヂミザサ
アカジソ, カナムグラ, ヒガンバナ
- 25. Sep. 2014 サクラタデ, ヒメジソ,
コツブキンエノコロ, ヌスビトハギ,
ギョウジャニンニク, ノブキ,
ナギナタコウジュ, カントウヨメナ,
ユウガギク, ホウキギク,
- 15. Oct. 2014 セイタカアワダチソウ, ヤエムグラ,
アカジソ, ホトギス, チカラシバ
- 24. Oct. 2014 マルバスマレ (狂い咲き)
- 6. Nov. 2014 ツワブキ, ホトケノザ
- 14. Nov. 2014 ナズナ
- 4. Dec. 2014 オオイヌノフグリ, ハルジオン
- 2. Jan. 2015 ニホンズイセン
- 13. Jan. 2015 ミドリハコベ

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	鳥類・植物	速水 淳子 (Hayami)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集	荒巻 知子 (Aramaki)